

資料紹介

続 経済学者の追悼文集（五）

杉 原 四 郎

はしがき

本稿ではつぎの順序で、11人の経済学者の追悼文集を紹介する。Ⅰでは明治のエコノミスト3人の、Ⅱでは京都大学教授の経済学者3人の、Ⅲでは関西大学教授の経済学者2人の、Ⅳでは高島善哉、上杉正一郎、布村一夫の追悼文集をとりあげる。単行本4冊、雑誌15種がその資料である。

Ⅰ

(1) 乗竹孝太郎 (1860—1909)

『東京経済雑誌』、第1473号、明治42年1月16日。

「乗竹社長の葬儀」は、12月8日の会葬者500余名の中の重なる人々の氏名をかかげ、友人島田三郎、東京経済学協会幹事阪谷芳郎・塩島仁吉、風紀革新会代表手代木研の弔詞、在大阪木村半兵衛の弔電をのせ、瀧台水、武田玄堂、山方泰、山形東根ら4人の弔詞をのせ、他に佐々木信綱の短歌、永田東洋、陸堂の漢詩がかかげられている。

島田三郎は、弔詞の中で、彼が乗竹を知ったのは明治11年、乗竹が尺振八の共立学舎の助教授だった時のことという。乗竹は嚶鳴社に入って論壇に登場、経済雑誌社に入って経済学協会でも活躍する；明治21年横浜正金銀行に入って要職を歴任するかたわら、明治法律学校で経済科を担当したが、明治38年11月経済雑誌社社長となる；島田は田口きあと彼を横浜正金銀行から迎えるに際して乗竹のしめした「亡友田口君に対するの情義及び社員の知己に感ずるの誠意に発したる……犠牲の精神」のことなどをのべている。常総新聞主筆瀧台水は、専修学校に在学中『東京経済雑誌』にのつた乗竹の文章を愛読し、さらに明治法律学校の講義録で経済学史を読んで「其学殖の豊富なるに」敬服したこと、をのべ、明治39年春はじめて乗竹に会い、後葉煙草売買業者失業補償の問題で彼の援助をうけ、「遂に天下の与論を動かし事の成功を期し得たる」ことを深謝している。また山形東根は、雑誌編輯係として乗竹社長のもとではたらいた3年間のことをつぎのように回顧している。

乗竹の社への出勤は週二日が原則だったが「君は頗る謙譲で久しく正金銀行に在りて、学界に遠かりし為め、今少し読書の時間を要すと言われて、出勤日を節せられたのであった」、「営業方針も米国風でなく英国風で……社中は極く堅実な方針を取(り)……華々しい事、時流に随うということが大嫌いである。……利を軽んじて義を重んじたる古武士の精神、英国風の紳士たる風采……今後之を見ることのできないのは遺憾の極みである」。

なお『東京經濟雜誌』の1474～1476号にわたって、乗竹に関する記事がのっている。

乗竹孝太郎の経済学を論じた文章は乏しい。私は「古典派経済学と『東京經濟雜誌』の第一節「經濟雜誌社の人々」の中で乗竹孝太郎の業績を解説しており(杉原『西欧経済学と近代日本』, 未来社, 1972年, 125—129ページ), 乗竹の著作集『肅堂遺稿』全4巻(1912年)については「わが国における経済学関係の個人全集」(杉原『近代日本經濟思想文献抄』, 日本經濟評論社, 1980年)の中で紹介している。

(2) 田口卯吉(1855—1905)

田口の主宰した『東京經濟雜誌』は彼の追悼特集号を6回出している。最初の4回は歿後の1282号と1283号(明治38年4月)と1285号と1286号(同38年5月), つぎに七回忌特集の1591号(明治44年4月), 最後に贈位記念の1834号(大正5年1月)である。このうち1591号にのったつぎの三篇は『田口鼎軒集』(明治文学全集14, 筑摩書房, 1977年)に収録されている。石川半山「鼎軒先生の特徴」; 久米邦武「故田口鼎軒君の史海を回顧す」; 黒板勝美「田口博士を想ふ」。

他の雑誌では『我等』の第九巻第六号(1927年6月)の「鼎軒田口卯吉博士——その人物と業績——」; 『日本歴史』第194号(1964年7月)の新訂増補国史大系完成記念特集号がある。前者にのった森戸辰男「文明史家並『社会改良』論者としての田口鼎軒」は明治文学全集14の『田口鼎軒集』に収められている。

ここでは最も多数の寄稿者のある『東京經濟雜誌』の1834号をとりあげることにする。

本号の93—140ページが特集記事であるが, その中は(1) 贈位記念記事, (2) 講演会, (3) 晩餐会, (4) 名流感想録, (5) 和歌及び漢詩の五部にわかれる。(1) は記念号発行の趣旨, 田口博士の著訳翻刻書の他, 田口博士と東京經濟雜誌, 東京經濟学協会, 東京府市会, 衆議院, 政党, 東京株式取引所, 両毛鉄道株式会社, 南島商会, 国史の研究の九項目, 合計十一項目よりなる。(2) は塩島仁吉の挨拶と5人の講演, (3) 塩島の挨拶と12のスピーチ, (4) は渋沢栄一はじめ29人の回想談(記), (5) は徳富猪一郎はじめ16人の詩歌を収める。なお巻頭に故人および田口の母, 妻, 姉など家族と石川暎作など故人ををたすけて經濟雜

誌社をささえた人々の遺影13葉をかかげる。

前述のように田口を追悼した8種の雑誌のうち大正5年に出たこの雑誌は62人という最も多い寄稿者があり、その中の約四分の一の人は『東京経済雑誌』の他の号にも執筆している。つまり田口と最も縁故の深い人物の多くが本号に執筆しているわけで、多方面で活躍した田口の全貌をうかがうにはこの雑誌のこの号が最も適しているといつてよいであろう。なお『東京経済雑誌』は全巻日本経済評論社から復刻出版されており、近くその総索引も同社から出版される予定である。

(3) 天野為之 (1860—1938)

『大成』、早稲田実業学校・大代会、1938年7月23日発行、天野為之先生追悼記念号、巻頭に遺影など五葉。表紙題字杉山令吉。

編輯後記は、「我が早実の父であり、校友六千の師であった先生が八十の高齢を以て他界された。……我等はここに先生の御生前交友最も深かりし知名の士の御寄稿を乞い、先生の御遺徳を慕う校友諸氏の追憶を綴り、『天野先生追悼記念号』を発刊し」たとのべる。

追悼文の執筆者のうち「知名の士」はつぎの6名である。

「天野博士を追悼す」	早稲田大学教授	平沼 洪郎
「弔辞」(昭和13年3月29日)	東洋経済新報社主幹	石橋 湛山
「天野先生と経済学」	早稲田大学教授	服部文四郎
「天野博士を追弔す」	早稲田大学教授	杉山 令吉
「天野為之先生を偲ふ」	前東洋経済新報社社長	三浦鍬太郎
「盡きせぬ思い出より」	早稲田実業校長事務取扱	小林 愛雄

平沼は天野が早稲田の他に東京高商でも経済学を講じ、福田徳三もそれをきいたこと、その頃になった『経済原論』(明治19年)は、ミルの『経済学原理』を基本とし、フォースェットやロッシヤの諸著を参考にしてなったものであること、自分と天野との交りは東京大学在学中にはじまり、大正6・7年の頃までつづいたことなどをのべる。石橋は天野に関して「之だけはどうにも特筆大書しなければならぬ」二つのことをあげる。(1) 天野は経済学の理論研究の必要を力説すると共に「現下経済の大局を達観し、その重大問題に鉄案を下すの知識と勇気がなければならぬ」と主張し、「且つ自ら此の両者を実行」したこと、(2)「若し夫れ経済教育の問題に至っては、少なくとも日清戦争以後今日至るまで、未だ我が国に比肩し得べき功績者の存したことを我々は知らない」こと。服部文四郎は「先

生程の学者先輩で、学士院にも列せられなかった。恐らくは先生は濫りに人に膝を屈するのを好まれなかったのであろう」といっている。杉山令吉も福田徳三が東京高商で天野の講義をきいたときの感銘を話していたとのべる。三浦は自分が東京専門学校できいた天野の経済原論に心酔し、東洋経済に入社して更に尊敬の念を強くしたことを語り、天野が東洋経済の育成に心血をそそぎながら、「しかも終世東洋経済から一文の報酬も取られなかった」、また明治40年5月に植松・三浦ら4人の合名組織にしたとき天野は之に加わらず、「少壮社員に、名実共に社とその経営とを挙げて譲」ったこと、さらに天野が早稲田実業学校の経営を大隈重信の懇請によって引受けてから、彼は一切の運営にあたり、早大の幹部が唯だ一人も協力せぬどころか、早大の教職員が早実の教職につくことを禁じるという挙に出て一時窮地に陥ることさえあったのに、よく今日の隆盛に導いたことを切々とのべている。小林は天野がモットーの「三敬主義」を早実で日々実践したことを語っている。

山名義高以下十数名の卒業生の文章がつつき、最後に略歴と「校葬記」がある。

『早稲田学報』早稲田大学校友会、715号、1961年10月、天野為之先生生誕百年記念。2-19ページ。本文中に遺影三葉。

編集後記に「本号を天野為之先生生誕百年記念号としました。大学では11月17日に式典を行ない、図書館では16・7の二日間展示会をひらき一般の人々に公開します」とある。巻頭に大浜信泉「天野為之先生の生誕百年祭に寄せて」があり、そこで大浜は、早稲田四尊(又は三尊)の中の一人である天野が大正6年の早稲田騒動を契機として当時学長だった彼は大学を去り、公的には大学と縁を絶ったことは、「早稲田大学にとって大きな損失であった」とのべている。

つぎに阿部賢一、三浦鎮太郎、磯部愉一郎、原安三郎、浅川榮次郎による座談会がある。そこで天野と田口との比較論が出てきて、三浦は「先生は教育ということが非常に頭の中にしみ込んでいる。それで経済においてもある成長した力ができて、その上は自由だが、それまでになる産業は保護しようじゃないか、教育的保護は人間にも必要だ……経済にも必要だと、これが先生の田口さんと異なっている経済論の中心ですよ」とのべる。また三浦は、「天野先生のやった仕事で忘れられて先生に功績を捧げることができなかった一事は金本位制のことなんだ」といい、天野の金本位論に対して反対したのは田口の金銀複本位論だったが、実際金本位制になったのに「ところが政府がやって天野先生は忘れられてしまった」ことを遺憾としている。つぎに早稲田実業の創立当初から英語主任をつとめた佐伯好郎「天野先生の追憶」がある。90歳をこえた彼が校史資料室の高野善一に語った追憶である。最後の略年譜は、『大成』にのったものよりずっと詳しい。

II

(4) 高田保馬 (1883—1972)

高田には『高田保馬博士の生涯と学説』が歿後10年目の1981年1月25日に創文社から出た(杉原『思想家の書誌』, 日外アソシエーツ, 82—83ページ)。ここでは歿後まもなく出た雑誌の追悼号を紹介する。高田は岩波書店, 日本評論社などからも著書を出してはいるが, 晩年には有斐閣からの出版も多くなる。古稀記念『社会学の諸問題』(1954年)も喜寿記念『分配理論の研究』(1964年)も, 有斐閣から出ている。

『書斎の窓』, 第208号, 有斐閣, 1972年4月。「高田保馬先生を偲ぶ」1～8ページ。遺影3葉。

簡単な略歴の他つぎの二つの文章をおさめる。

「二つの歌碑——歌人としての高田保馬先生——」大道安次郎。

大道は高田に『ふるさと』, 『洛北集』, 『望郷吟』の歌集3冊があり, 「昭和38年の宮中歌会始に召人として選ばれたのも故なしとしない」とのべ, 高田は京大在学中に新詩社に歌稿をおくりはじめたこと, 晩年は窪田空穂に高く評価されたことを書くとともに, 召人になったことを契機に二つの歌碑ができたことを紹介する。一つは佐賀市の佐賀西高等学校(故人の母校)の校庭にあるもの(除幕式は1966年11月3日)で, つぎの歌が刻まれている。

ふるさとの山はなつかし母の背に昔ながめし野火のもゆるも。

もう一つは阿蘇の波野の山頂にあるもの(除幕式は1971年4月7日)で, 召人としての歌が刻まれている。

白白と末はみ空の雲に入る波野のはらの穂すすきのむれ

私はかつて「歌人経済学者」という文章の中で高田の短歌をとりあげ, 河上肇のそれとくらべてみたことがある(杉原『讀書燈籠』未来社, 1982年, 61—62ページ)。

なお大道には『高田社会学』(有斐閣, 1953年)という著作がある。

「高田保馬先生をしのぶ」木下和夫

この文章も高田の「大川の南と北とに生れあいてつながるものか一つ眞(まこと)に」という短歌からはじまる。高田が『勢力論』の扉にかいて木下にあたえたこの歌は, 筑後川をへだてて故郷を共にする後輩の経済学者木下への期待がこめられているが, 木下は京大の高田ゼミに学んで以来の, また大阪大学では同僚だったという親しい関係の中で高田に師事してきた間の見聞をかきつらね, 最後にこう結んでいる。

「わたくしの目の前には、ジェヴォンズの一巻がある。これは米田庄太郎博士から先生に贈られ、そして先生がわたくしに下さった書物である。先生の筆で『このジェヴォンズの一冊古び且つ損じていますが永く書架に存していただきたいと存じます』とある。先生は私の激しい性格をよく御承知で、静かに勉強せよ、といっておられる。わたくしはいま、悲しくそしてつらい」。

(5) 石川興二(1892—1976)

『經濟論叢』第118巻第3・4号, 1976年9月10日

出口先生からいただいた本号の抜刷の表紙には、「故石川興二名誉教授遺影・略歴・著作目録。『師を憶う』出口勇蔵」とある。遺影一葉、「哀辞, 京都大学経済学会」, 簡単な略歴と、平井俊彦の作成した著作目録, それに京大経済学部における石川の経済学史の講義を戦後継承した出口勇蔵の上記の追悼文一篇がおさめられている。

出口は、恩師が「約8カ年の闘病のすえに、奥様の見事な御看護の甲斐もなく」あと3カ月で84歳を迎えようとする1976年3月15日に死去したことをのべ、Ⅰ「輪読会」で、石川が有志の学生を指導していた輪読会でディルタイの歴史哲学の論文をよみはじめ、やがて「生の哲学」の立場を理解しうようになったこと、Ⅱ「ゼミナール」で出口が院生から講師にいたるまでの1931—42年間、ゼミに出席して石川と学生との間の世話をしたが、その間京都近郊や大和旅行に出かけたときの 嬉しい 思い出を のべている。Ⅲ「戦時の先生」では、石川が京大の人文科学研究所の設置に尽力したこと、経済学部長として経済学部の講座の増設にも熱意をもやし、関係官庁との交渉にあたったことをのべ、Ⅳ「先生の学問」では、マーシャルと西田幾多郎と河上肇の三人に対する石川の尊敬、とくに西田に対する傾倒ぶりや石川が西田と河上との媒介に力をつくしたことを書いている。そして率直に恩師の西田哲学に対する護教的態度をとりあげて石川には「他人の見解を客観的に理解しようとする態度がすくなかったことは残念」だとのべている。最後のⅤ「先生の生活と長患」で、「先生は共同体思想のもち主であったから、家庭を非常に大切にされた」、また終生質素な生活を送られたと書いている。水田・杉山編『アダム・スミスを語る』(ミネルヴァ書房)のⅡ「京都大学におけるスミス研究」の中で、出口は河上肇の退職のあと、石川が経済学史と経済哲学——経済哲学は一時恒藤恭が担当していた——との講義をしていたこと、石川の学位論文『経済学祖アリストテレス並に経済学父アダム・スミスに於ける精神科学的経済学の基礎問題』(弘文堂, 1930年)では、「力点はアリストテレスに置かれていて、スミスは『国富論』の第一編の紹介で」あることなどをのべている。

私は石川が経済学部長であった1939年に入学し、在学中石川の講義（「日本経済理論」と「社会政策」）をきいたが、個人的な接触が生じたのは、死後河上肇を偲ぶ会においてであって、それを通じて、著作の交換がはじまった。私が東京河上会会報第40号（1976年5月）に「石川興二先生を悼む」（杉原『読書燈籠』未来社、1982年に収録）を書いているのもそうした関係からである。

(6) 蛭川虎三（1897—1981）

『経済論叢』京都大学経済学会，第127巻第4・5号，1981年4・5月。

巻頭に「哀辞」（1981・4・1，京都大学経済学会），巻末につぎの文章をおさめる。

「蛭川先生追悼の記——先生の会計学研究——」，岡部利良。

「蛭川虎三先生——その人と業績——」，大橋隆憲。

岡部は蛭川が1934年より京大経済学部で担当していた会計学の講義を戦後継承しており，Ⅰ先生の会計学——統計学とのつながり，Ⅱ先生の会計学の特質・その学問的寄与，Ⅲ残されている問題の三節で蛭川会計学を解説しているが，蛭川が会計学の研究対象を会計方法と限定したことに対し，その積極面を認めつつも，会計学の研究対象は決して会計方法だけではなく，会計実践をもふくむべきものとしている。岡部は以上の点の詳論を「蛭川先生の会計学——とくに会計方法の理論について——」（蛭川先生古稀記念論文集『現代の経済と統計』[1968年]所収）にゆづり，Ⅳ「講義，演習，院生のころのことなど」で蛭川の人柄，学生への接し方などをのべ，最後に東山山麓の智積院にある蛭川の立派な墓を紹介している。

大橋は，戦後京大経済学部で蛭川の統計学の講義を担当しているが，蛭川統計理論を論ずることは別の機会にゆづるとして，本稿ではまず京都大学時代の蛭川の「生活の一端」をのべ，ついで「蛭川統計理論を基礎として，日本の障害者統計——本年は国際障害者年の初年に当たると大橋はいつている——の解説と批判を試み」ている。なお大橋の『日本の統計学』（法律文化社，1965年）の中の「蛭川虎三」を参照。

『統計学』，経済統計研究会，第42号，1982年3月，特集蛭川統計学の現代的意義（1—55ページ）。

本誌にはつぎの4人の文章と，編集委員会編「蛭川虎三著作目録」とがある。この目録は，蛭川の京大退官前の時期に焦点をおいたこと，作成にあたったのは野沢正徳，長屋政勝，桜田忠衛の三人であることが注記されている。

「統計利用者のための統計学と蛭川統計学」，関弥三郎。

「蠅川博士の時系列論」, 大屋祐雪。

「蠅川統計学へのひとこと」, 米沢治文。

「故・蠅川虎三全員を偲ぶ——追悼文に替えて——」, 内海庫一郎。

このうち内海の文章は、(1) 経統研と蠅川虎三会員、(2) 蠅川会員の理論的業績、(イ) 統計学、(ロ) 会計学、(ハ) 水産経済学、(3) 蠅川統計学に対する諸家の批判からなり、関係文献が数多く紹介されている。内海はその中で「蠅川統計理論の意義を最も詳しく検討したものは、大橋隆憲の『統計学総論』(1960年)である」としながらも、大橋による蠅川理論の要約に批判的なコメントを加えている。なお内海は『東京河上会会報』第47号(1981年7月)に「河上肇と蠅川虎三」を、『統計学』第47号(1984年9月)に「福本和夫と蠅川統計学」を書いている。『聞き書き・波乱の昭和私史——内海庫一郎先生——』(シグマ会編, 1991年, 非売品)の6「蠅川先生の交流と蠅川統計学」をも参照。

『経済』, 新日本出版社, 1981年6月。

「蠅川先生を悼む」186-191ページ。そこにつぎの二つの文章がおさめられている。

「蠅川さんを想う」 細野武男。

「蠅川先生と統計学」 有田正三。

細野は京都府知事としての蠅川の業績を語り、彼の数々の語録——「反共は戦争の前夜の声」もその一つ——を紹介している。有田は「蠅川先生の統計学は1920年代にいたるドイツ社会統計学がもつ学問的成果を批判的に継承しつつ、ゴールトン=ピアソン流の数理統計学の批判的摂取によって、社会科学の領域における統計学の再編成=新展開をはかったものである」と書いている。『経済』には1979年1月号にも「蠅川虎三経済談義, 私の経済論(座談会)」がのっており、出席した有田がそこでも蠅川統計学について発言していた。なお蠅川の没後1年に有田は『京都民報』1982年2月27日号に「学者・蠅川先生——その業績と思い出——」を寄稿したが、そこをつぎのように書いている。「先生は学者として身を律することにきびしかった。……昭和21年2月, 先生は学部の戦争責任などに対処する処置として教官退陣を指導され, 京大を去られた。進歩的教授を追放し, その後にも学問の自由と大学の自治を守ることに於いて欠けるところがあり, 戦争に協力した帝国大学が真理・自由・民主主義に生きる国民的大学として再生するためには, 大学として果さなければならないことがある, と判断されたのである」。

なお有田には、蠅川の『統計学概論』が1985年に岩波書店から再刊されるに際し、『図書』(岩波書店)第426号(1985年2月)に「統計学者, 蠅川虎三先生」を寄稿し、「蠅川統計学」についてつぎのように書いている。蠅川は京大卒業後、「私淑する河上肇先生を

中心とする恒藤恭先生や三木清、戸坂潤さんらも加わったサークルに参加し……その中で統計学理論の構築に進むのだが、「それはマルクス主義の開化を軸とする大正末期から昭和初年にいたるわが国の社会科学の大きく新しい展開の一環を形成する」。

III

(7) 高木秀玄 (1916—1987)

『経済学会報』, 第7号, 関西大学経済学会, 1986年12月。高木秀玄先生古稀祝賀特集 38—54ページ。

高木は1987年3月末に満70歳で関西大学を定年退職し, 4月1日に関西大学名誉教授になったが, 前年から体調をくずしており, 同年7月12日病歿した。それで本誌の古稀祝賀特集が事実上その追悼特集となった。つぎの6人の文章がおさめられている。

「関大生活50年」	高木秀玄
「高木先生に教えていただいた数々」	吉田 忠
「学者らしき学者『アレンの高木先生』」	東井正美
「統計学を庶民のために」	荒井政治
「学びたい先生の情熱」	佐藤 博
「関大生を愛して50年」	山本繁綽

高木は1935年に関大予科に入学して以来のたのしくすごした学生生活を関大の体育会の活動を中心に回顧している。高木は多年野球部の顧問をつとめた。吉田忠(京都大学)は経済統計研究会で種々の刺激をうけ, 統計学史の貴重な文献を読むうえで世話になったことを書いている。私もディルクの *The Source and Remedy of National Difficulties*, 1821のコピーを, 1956年ロンドン大学に留学中の高木から送ってもらったことがある。

東井, 荒井, 佐藤, 山本の4人の同僚はいずれも高木の統計学者としてのなばなしい業績や, 学内では経済・政治研究所の所長として, 学外では統計学会をバックとした日本学術会議会員としての活躍について, また後進の研究者や学生の指導に情熱をかたむけた様子をこもごも語っている。

『統計学』, 経済統計学会, 第53号, 1987年9月。

「故高木秀玄会員の逝去を悼みて」 木村太郎

木村によれば, 高木の統計学研究の特長の第一は, 生涯にわたる指数論の研究で, 彼の最後の学会報告が「ラスパイレスの人と業績」であったのは研究生活のしめくりとして相応しいとのべ, これらの業績を一書にまとめてほしかったと書いている。第二に包括的

な統計学教科書の精力的な出版活動をあげ、とくに1967年の『統計学総論』(ミネルヴァ書房)が蜷川統計学の立場を明確にしていることに注目するとともに、其後高木はむしろ数理統計学との接触を広げてゆくようになるとのべている。第三に外国統計学書の翻訳出版を活潑に行ったこと、とくにロンドン大学で師事したアレンの『経済研究者のための数学解析』やウォルポールの『統計学初歩』など英・米の数理統計学の入門書の紹介に力を入れたことをあげている。

経済統計学会代表の大屋祐雪が告別式のときによんだ「弔辞」で、3月23日の古稀の祝宴で高木に会ったのが最後になったこと、そこで彼が宮崎の大学での新生活を楽しそうに語っていたことを書くとともに、日本統計学会は彼を名誉会員に推挙することを総会できめたことをのべている。

高木秀玄『物価指数論史』、発行高木秀玄先生著作刊行会(関西大学経済学部統計学研究室)、1994年7月12日、A5版202ページ、巻頭に遺影一葉、非売品。

本書には故人の物価指数論史に関する論文六篇(すべて既発表のもの)を収録し、巻末に故人の略歴と著作目録と解題、座談会「高木秀玄先生の学問とお人柄」がおさめられている。「あとがき」(世話人代表藪内武司)や世話人(8人)一同の挨拶状によれば、追悼集の話は一周忌の直後にあったが、著作集や論文選集などとの兼ね合いの論議でまともらぬまま7回忌を迎えてしまい、物価指数論の形成史にテーマをしぼった論文集を刊行することに決定、「先生の8回目のご命日に、門下生、研究関係者の協力によって」本書を刊行したとある。

解題は石原健一が書き、座談会の出席者は石原健一、岩井浩、宍戸邦彦、新熊邦男、茶谷静夫、藪内武司、吉田忠(司会者)ら、刊行会の世話人たちである。そこで「先生は関大経済学部が自前で生んだ最初の教授のお一人ですから、もっと関西大学の枢機に参与されてもよかったのですが……」、「あの天衣無縫なお人柄が私立大学の難しいキャンパスポリティックスには向かなかったのでは……」というやりとりがある。高木の本領はやはり大学の外での学会活動にあったのではないか。その意味で、木村太郎や大屋祐雪が高木の代表的業績としていた指数論史が門下生の手で一書にまとめられたことを、誰よりも本人自身よろこんでいることと思われる。

(8) 木村雄二郎(1929—1994)

『いばらずかざらずきどらず——木村雄二郎追悼集——』木村雄二郎編集委員会編、(関西大学生協同組合気付)、1994年7月1日発行、A5版295ページ、非売品。巻頭に

遺影18葉、本文中に写真多数、題字関西大学学長大西昭男。

巻末に編集委員会(委員長小川悟)の簡単な「あとがき」がある。本文は、故人の随想(いくつかのエッセイと書簡)とイギリス留学中のたより(津川正幸編);追悼文集(弔辞等、先輩・友人・同僚の思い出、交換教授・留学生との交わり、クラブ(重量挙部)との交わり、吹田市監査委員会として、生協、家族);故人の略歴と関西大学・生協、「ガンがわるさする、病室の先生」(村井弘二)との三部からなる。

故人は母校関西大学の教員として1953年から1994年まで42年間つとめた(没後名誉教授となる)。三谷友吉教授と松原藤由教授に師事し、多年「計画経済論」を講義した。二度目のイギリス留学を目前にして病に倒れた。関大においては経済学部の学部長はじめ諸役職の他、教学部長代理や大学協議会協議員、重量挙部顧問、とくに1984年以来関大生協の理事長に就任している。本書にあつめられた追悼文は、こうした多方面にわたる故人の活動ぶりをつたえている。

研究者としての故人については、新野幸次郎が「印象的な学会報告——木村先生の思い出——」で、彼が日本経済政策学会の幹事を20年以上もつとめ、関西西部会で二度報告したこと、とくに1974年12月の報告「イギリスにおける経済計画——1960年代の経験——」につよく感銘したことをのべている。私は「木村君のイギリス研究」で、故人の計画経済研究が、イギリスと日本を中心とした政策論的アプローチだったこと、二度目のイギリス留学でそれをまとめる計画だったろうことを書いた。越後和典、小山弘健、林木西(中国遼寧大学)の諸氏も故人の研究者としての諸側面にふれている。

一般に私立大学に於ては、法人与大学、教員と職員、本学出身者と他大学出身者、その上イデオロギーの異なる教員間の、人間関係の融和がむつかしい問題であるが、その場合本学出身の教員のはたす役割りはきわめて大きい。故人はその役割りを見事にはたし了えた。この追悼文集はそのことを如実にしめしている。

追悼文集の最後におさめられたのは次男理氏の「父へ」である。故人のなくなる5年前、人生を悲観して「こんなに僕が苦しいのは世の中が悪い」といった次男に対し、「今まで私には全く涙など見せない父が、うづくまって泣き『そんな情けないことを言うな!……お前は倒れることを恐れ過ぎている。……お前は弱い人間だからいつかまた倒れるだろう。でもまた立ち上がればよい。そうすれば、お前は他人の辛さや痛みのわかる大きな人間になれるだろう』」とさす。この言葉で「父がとて大きく本当に尊敬できる人であるということ」がわかったと理氏は書き、「僕にくれた言葉をいつも思い出して一生懸命生きてゆきます」とのべている。

巻末の年譜(木村雄二郎、関西大学、生協、政治・経済・社会の四段構成)は充実していて、本書の棹尾をかざるにふさわしい力作である。

IV

(9) 高島善哉(1904—1990)

『如水会々報』, 1990年3月号, 「高島善哉名与教授を偲ぶ」, 22—24ページ。

「高倉先生のアイロニー」, 山田秀雄。

高島は1927年東京高大有を卒業後すぐに母校にのこり、1938年に大学助教授になった。山田はその第一回ゼミに所属した。『経済社会学の根本問題』が出版されるのはその3年後である。山田によれば、1940年代に商大予科長とに教育の陣頭指揮をとったが当時は高島の眼はさほど悪くはなかったが、1966年に一橋大学を退官する頃には失明に近い状態で、門下生を中心とする「高島善哉の会」は高島の研究を支えるための基金を設けた。その会が米寿の祝いを企画している矢先きに、高島は1990年1月10日に逝去した。山田は高島の講義や著作や会話の中で当意即妙なアイロニーを味わったことをのべ、最後にこう書いている。彼が12月中旬に恩師を病状に見舞ったとき、「夏にロンドンの店リパティで先生用にもとめたマフラーを持参、そう説明した私に対し、先生はこう答えられました——『ありがとうございます。リパティか、それなら Liberty from life だ……』。私は絶句しました。気がついて見ると、私は先生のアイロニーに魅せられてなんと50年を過ぎてしまったのです。」

「百川日夜逝」, 長洲一二。

1944年に一橋大学を出た長洲は卒業後も背広ゼミで月一回阿佐ヶ谷の高島の宅を訪ねたこと、学部のゼミの最初のテキストはヘーゲルの『歴史哲学』で、卒論にヘーゲルの『法哲学』をテーマ選び、ヘーゲルとスミスを対比したのだが、その時「むしろ直接にマルクスを論じた方がいいように思います」というと、高島は「君、今そんなことを言うてはいけないよ」と笑って答えたことなどをのべている。

「高島先生の学問」, 古賀英三郎。

古賀は、高島が大塚金之助のゼミで書いた卒業論文「経済静学と経済動学の国民経済的意義」(1927年)や「金利生活者経済学最後の型」(1929年)、「価値論なき流通論」(1929年)、「静観的経済学の止揚の方法」(未発表)などの初期の労作の紹介からはじめて高島のめばしい業績を『現代国家論の原点』(1978年)までたどって、つぎのように結ぶ。「最晩年の先生のご関心はイデオロギー論にあった。先生は一貫して生産力理論の重要性

を強調されたが、その意味が不肖の弟子たる私には十分理解できなかつた。不肖の弟子たるゆえんである。」

なお『如水会々報』第743号(1992年3月)の「橋畔随想」には、宮崎犀一が「高島先生の学問」を書いて、恩師の「一大論集『市民社会論の構想』(高島善哉の会企画・山田秀雄編, 1991年, 新評論)に見られる高島の学問の目標がきわめて高邁で、その学殖の幅は驚くほど広い」ことをのべ、その業績の今日的意義の大きさを強調している。

水田洋「追悼 高島善哉先生」、水田『評論集クリティカルに』(御茶の水書房, 1994年)「補論I師の影」(244-268ページ)所収。

高島が逝去したその年と学徒出陣50年にあたる年に、水田が『図書新聞』(1990年1月27日号), 『経済学史学会年報』(同年11月), 『朝日新聞』名古屋本社版1993年8月27日夕刊)とに書いた追悼文を1, 2, 3に若干の註を付しておさめ、4と5に新たに書いた高島との関係や、恩師から何を教えられたかについての文章が加えられている。

1937年の晩春東京商大予科2年の水田が高島によって「肉体的存在として認識され」て以来、とくにその翌年高島が水田のクラス担任となって以来の関係や、1989年11月に、名古屋で開くスミスの国際シンポジウムの準備のために高島を訪ねる——このときの高島の談話は水田洋・杉山忠平編『アダム・スミスを語る』(ミネルヴァ書房, 1993年)のIに収録されている——までの師弟関係の歴史が、高島の学徒としての歩みを中心に、半世紀間の時代的背景の中で回顧されている。山田秀雄と同じく、ここでも高島の得意とする皮肉が語られ、高島の「ただイロニイを解する者だけが現代を知ることができる。だから私はロマンティストならざるロマンティストを愛するのだ」ということばが紹介されている。

4に学界における高島山脈が概観されていて、あらためてその威容におどろかされる。5には水田が高島から教えられたものが「徹底した批判の精神」であること、そうした精神から恩師をみた場合の、高島に対する不満や批判が率直に語られていて、この師弟関係のつよいきびしいきずに羨望を禁じえなかつた。

なお関東学院大学の『経済系』(高島教授退職記念, 第124集, 1980年7月)には高島の著作目録がのっている。

(10) 上杉正一郎(1912-1990)

『追想上杉正一郎』, 編集上杉正一郎追悼文集刊行会, 発行人和合二郎, 発行所産業統計研究社, 1991年11月25日発行, 非売品, A5版491ページ。巻頭に遺影など27葉。題字

足羽徳。

「あとがき」(刊行会世話人代表広田純)は、1991年1月に経済統計学会会員有志、東経大上杉ゼミOB有志などが上杉宅で御遺族と相談の上、追悼文集刊行の企画をたて、25名の刊行会発起人をきめ、刊行会の醸会をつのつたら282名に達したことや、執筆を90名にお願いしたこと、後半に故人へのインタビューの記録や故人の論文エッセー等を収録したことなどをのべている。全体の構成つぎの通り、I 弔辞・弔電(田沼肇や松田道雄や宮本顕治など)、II 追想、1. 一高東大時代、2. 京大時代、3. 大連時代、4. 通産省・農林統計協会のころ、5. 上杉君について思い出すこと三題(木村太郎)、6. 大阪市大・東京経大、7. 東経大ゼミナール、8. 経済統計研究会、9. 身近な人たち。III インタビュー、IV 家族の聞き書き、V 手紙、1. 戦前・戦中の便りから、2. まごへの葉書(1982—89年)、VI 著作の中から、1. 匿名論文、2. エッセイ、VII 著作目録、VIII 略年譜、ごあいさつ上杉昌子、あとがき。

IIの「追想」には一高東大の学生時代から故人がその創立に尽力した経済統計研究会(→経済統計学会)時代までの八つの時代と、遺族を中心とした身近な人たちの九節にわけて、それぞれに関係の深い人々の回想が収録され、おのずから故人の生涯を時代を追ってたどれるようになっている。私の知っている人の寄稿(たとえば2.の有田正三、内海康一郎、酒井一夫、3.の岡部利良、5.の崎山耕作、8.の岩井浩、藤岡光夫、丸山博、吉田忠、9.の上杉重二郎などの文章)が注意をひいた。

IIIのインタビューは研究者としては波瀾にとんだ経歴を送った故人の生涯を具体的に知りうる内容になっていて興味をそえる。とくに京大時代蟻川研究室ですごした頃の思い出、近代経済学批判や経統研のことや蟻川統計学をめぐる伊藤陽一、広田純らにこたえての感想など、上杉の代表作『マルクス主義と統計』(1951)、『経済学と統計』(改訂版1974)を読むうえでも参考になるところが多い。故人はそこで、後に長谷部文雄・鬼塚英雄編『資本論全三巻索引』に収録された「年代順事項索引」を京大時代に作った時のことをのべている。私はこの索引から多くのことを学んだ。インタビューのこのくだりをよんで、京都府知事選挙(1950年)のときに何度かお目にかかった故人の白暫な風貌——私は故人と入れちがいに京大経済学部に入學した——をなつかしく思い出した。

(II) 布村一夫(1912—1993)

『女性史研究』第28集、編集家族史研究会、発行1994年3月31日、頒価1,000円、A5版132ページ。

特集「布村一夫先生追悼・現代熊本の女たち」, 1975年創刊された『女性史研究』の最終集で, I「布村一夫先生を悼む」2-35ページの内容はつぎの通り。

「布村一夫先生の最終講義」(第二話鼻たれ小僧さま(福岡県の民話))

追悼文11, これらは, 江守五夫(比較家族史学会会長)の「追悼の辞」のように, 1993年6月17日告別式に捧げられたものや後日書かれたもの(石塚正英, 上河一之など)がある。熊本商大や熊本女子大や熊本近代史研究会, 家族史研究会などで教えをうけた人々や坂口孝明のような遺族(「兄, 師, 布村一男を偲ぶ」)によって書かれている。シュミット・昌子の「マックス・ブルクハルト未亡人にきく」は, 布村に「喜んでいただける」パーゼル便りで、『パッハオーフェン全集』の未刊の第5巻と第9巻とが, 近く出版されるという内容だ。

II「現代熊本^の女たち」の中に「熊本女性学研究会育ての父・布村一夫先生」(石原通子)がある。石原はそこでこの研究会が1990年2月の創設以来病没する一カ月前までの間に布村が一二回の連続講義をしたことをのべて, つぎのように結んでいる。

「布村一夫先生は母権社会を父にかわって母が権力を持つ社会ではなく, 自由・平等・友愛の実現された原始共同体であると論じてこられました。そして未来はそれが高度の形態で復活した母権社会であるという学説をうち立てられました。この未来の推進力になるのはあなたたち女であるといつも激励されたものです。この言葉を胸に未来に向かって努力していきたいと思います」。

巻末に著作目録と『女性史研究』の総目次がある。著作目録は, 1939年に満鉄奉天図書館の『収書月報』第37号にのった「四庫全書と露西亞」よりはじまり, 1943年『書香』(満鉄大連図書館)第153号にのった「明末清初の満州族に関する一考察」までの満州時代と, 1948年『中国研究』第4号にのった「ソ連の『抗戦中国』研究について」以後の戦後日本での労作とにわかれる。布村のライフワークである『正倉院籍帳の研究』は歿後刀水書房から1994年2月に刊行された。A5版580ページ, 布村の「あとがき」の日付は1994. 3. 24。本書の石原通子による紹介が, 本書と布村との写真とともに, 『季報唯物論研究』第49/50合併号(1994年8月)にのっている。

布村の著書12点のタイトルからもわかるように, 彼の研究の中心はマルクス・エンゲルス・モルガンであり, とくにモルガンの『古代社会』, マルクスの『古代社会ノート』, エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の三つの書物であった。だが彼の代表作『原始共同体研究』(未来社, 1980年)におさめられている「古典経済学における原始人」のスミス・リカードウ研究や『正倉院籍帳の研究』の第17章「班田農民は^{〜リッ}隷農であった——

ジョーンズの^{ライオット}小農民地代によせて」におさめられているリチャード・ジョーンズの研究に見られるように、イギリス經濟思想史への関心が強かった。私と布村さんとの交流もマルクス・エンゲルス・スミスを通じてはじまったように思う。

後記 本稿を草するに際し、資料蒐集の上でつぎの方々に御世話になった。厚く御礼を申し上げる次第である。深井人詩，出口勇蔵，有田正三，岩井浩，桜田忠衛，和合二郎，水田洋，星野彰男，金沢幾子，布村信子，犬童美子。